

はじめに

人のしぐさや顔の表情は魅力的です。ことばがなくてもその人の気持ちや感情を伝えますし、ことばとともに使われれば、そのことばの解釈により深い洞察を加えることもできるようになります。このように、コミュニケーションの中で大切な役割を果たしている身ぶり・しぐさ・顔の表情を辞典として一冊にまとめたのが本書です。英語話者のジェスチャーについては何冊か類書が出ていますが、日本人の身ぶりについてこれだけの詳細な調査結果をまとめたものは、おそらく本書がはじめてでしょう。海外からのビジネスマンや留学生にも関心を持っていただけたらと願っています。

筆者は日本人のコミュニケーションを、共同研究者の Laura Ford はアメリカ人のコミュニケーションを多くの人に理解してほしいと願い、お互いの文化のしぐさや表情・行動様式の共通点や相違点を明らかにしようと、1982年から研究プロジェクト「身振りの日米比較対照研究——『身振りの辞書』作成を目的として」を開始しました。そして、日米の映画やテレビドラマを使って、お互いの文化で日常よく使われる身ぶりを一つ一つ拾い上げ、その意味を探るところから研究を始めました。

私たちは個々の身ぶりについて、日米それぞれの文化の母語話者としてさまざまな観点からディスカッションを重ねました。そうする中で、意味だけでなく、男女の性別、年配・若者・子供といった年齢、相手と親しい間柄かどうか、目上か目下かといった上下関係や形式度、上品か下品かという品位、ことばと一緒に使われるかどうかなどの「使われ方」に暗黙のルールがあることに大変興味を持ちました。そして、この調査から得られた「使われ方」についての記述は、本書の大きな特徴となっています。

ディスカッションの結果を基礎データとした上で、日本人については、漫画のイラストを用いてアンケートを作成し、学生や社会人100名に協力してもらい、その結果を客観的なデータとして考察に加えました。また、アメリカ人については、South Carolinaで30名の地域の人々に、基礎データとした映画の場面をビデオで見てもらって意見を聞き、分析に加えました。さらに、日本人の身ぶりが英米の人々にどのように理解されるかについては、日本にいる英米人8名に詳細

な記述式のアンケートを依頼し、協力してもらいました。このように客観的データを加えた上で考察を重ねてはいますが、それでも、本書の「日本人の」「アメリカ人の」は、この調査に協力してくれた人々と私たちの意見という限定つきであることとお断りしておきます。

本書は、身ぶり・しぐさ・顔の表情についての一つの記録です。若者語に流行があるように若者の行動様式も常に変化していますし、しぐさの男女差が減りつつある傾向も日米ともに見られます。また、国際的にも人の交流が増え、さまざまな国のニュースやスポーツ番組、映画などの映像が手軽に見られるようになり、文化ごとの違いにも変化が顕れてきています。したがって同様の研究を継続し、そのときどきの変化を記録していくことが重要でしょう。

<異文化スケッチ>というコラムでは、筆者のヨーロッパでの体験談を描いてみました。ヨーロッパはまたそれぞれの国や地域で独特なしぐさがありますし、イギリスとアメリカも同じ英語圏でありながらさまざまな違いがあります。ヨーロッパを中心にした身ぶりについては、著名な動物行動学者であるD.モリスの著書『ボディートーク 世界の身ぶり辞典』があります。本書で取り上げたしぐさに関連したものは、巻末の項目一覧に一表として挙げましたので、参照されると奥深いしぐさの世界にさらに興味を持たれることでしょうか。アジア文化圏についてのしぐさの研究は、まだ開始したばかりであり、今後成果をまとめることができると考えています。

本書ができあがるまでに、多数の人々の協力がありました。研究段階では、トヨタ財団から研究助成金と出版助成金を、明海大学から特別研究費を得ることができました。アンケートの集計やイラストの下絵作成には明海大学の卒業生が協力してくれました。また、本書をまとめる最後の段階に在外研究でヨーク大学に滞在したことは非常に有益でした。編集・校正の段階では株式会社ジャレックスの村上眞美子さんにお世話になりました。そして最後に、長期にわたった研究の間、僅かずつしか仕上がらなかった原稿を辛抱強く待ち続け、励ましてくださった三省堂編集部の柳百合さんに心からお礼申し上げます。

2003年6月1日 ヨークにて

東山 安子